

研修員に聞くーお国自慢あれこれ



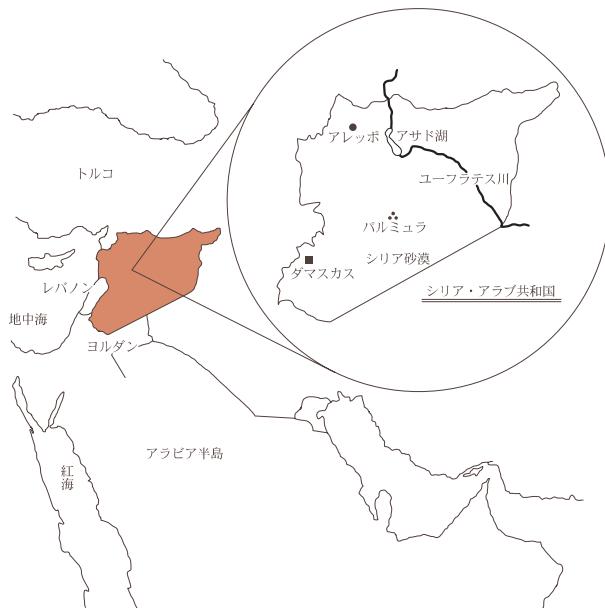
アブドル・ラーマン・カラーシュさん

(シリア・アラブ共和国)

Mr. Abdul Rahman Kalach

シリア農業省種苗増殖総合研究所小麦課技官

帯広国際センター「畑作物の種苗生産」コース
(2000年4月2日～7月16日)で研修。



シリア、世界最古の国のひとつ

歴史上、いわゆる「シリア」の名が最初に現れるのはエジプトの年代記で紀元前4000年代のことである。今のシリアを中心にレバノン、ヨルダン、パレスチナまでを含む広範な地域をさす呼び名であった。紀元3000年代になるとシュメール人の商船が、エジプトがミイラづくりに必要とした松ヤニを摸るのに現シリア国内のイトスギ、ヒマラヤスギ、松をビブロス港（フェニキアの港、現在名ジャベイル）で取引したという記録が残っているという。

カラーシュさんの故郷はシリア第二の都市アレッポの近くだが、その近郊の遺跡からは、紀元前2300年頃に生まれた最初のシリア帝国が当時のアッカド王国と対峙していたことが類推できる痕跡が発見されている。シリア国内の都市国家はその後も巻き貝から採取する紫色の染料の交易などで繁栄し、世界最古の都市のひとつである現在の首都ダマスカスは長く地中海東部世界の富の象徴として繁栄を誇った。

文明の十字路、東西世界の要衝の地であるために様々な国家の支配に翻弄されてきたが、第一次世界大戦後にオスマン・トルコ帝国から独立、フランスの委任統治時代を経て、第二次世界大戦後の1946年、完全な独立を果たした。

シリア北部の豊かな小麦地帯

シリアの中央省庁は当然首都ダマスカスにあるが、唯一、カラーシュさんの働く種苗増殖総合研究所だけはアレッポに置かれている。シリア北部は乾燥気候ではあるが水資源が豊富で農業生産に適していて、特に小麦の品種改良に期待がかかっている。今回の研修では、実習を交え、主に小麦の優良種苗の生産に必要な栽培、採種、育種などの技術を学んだ。

「高品質、高収入を目指す農民たちのためにも今後的小麦づくりに尽力したい」と、育苗・増殖の専門家であるカラーシュさん。ただ昨年雨が少なかつたので「今年の作柄をちょっと心配しています」を表情を曇らせていました。

18.5万平方kmの国土の大半は砂漠だが、海岸や山岳地帯など自然風土は多岐にわたり、農作物もオリーブ、ブドウ、トマト、豆やジャガイモ、綿花と多彩である。

ヤジイーズ教とヤジイーズ人

カラーシュさんは平均的日本人くらいの身長だが、肩幅が広くいかにもがっしりとし

た体格をしていた。ものの本によるとまさにこれぞヤジイーズ人という逞しさということのようである。

シリアの人口は約1,700万人。国民の大部分はイスラム教徒であるが、少数のキリスト教徒やアラウィ教徒がいる。一般にはクルド族とされるシリア・ヤジイーズ人は1～2万人いると推定され、シリア第二の都市アレッポの北部、西部などに住む。キルマンジィ語という少数民族を話し、イスラム教神秘主義、キリスト教、ゾロアスター教などが混交した宗教といわれるヤジイーズ教を信仰している。ヤジイーズ人は自立心の旺盛な民族と言われているが、シリアでは、先頃亡くなったアサド前大統領の統率の下、故地回復の抗争も見られず、共存が実現している。

クルド族の女性はイスラム教の掟には拘束されず被り物もしていない。ただ、家庭は家父長的な傾向が強く多くのアラブ女性の日常と変わらない様子ではあるが、カラーシュさんは、「日常的にも色鮮やかな衣服を着用し、春の祭では賑やかに歌ったり踊ったりしますよ」と故郷を懐かしむ口調で話してくれた。

* * * * *

研修員にインタビューする度に感動するのは、彼らが、自国や地域の豊かな伝統文化や歴史を非常に大切に思い、誇りにしている姿である。今回のカラーシュさんもまたシリア国民としての忠誠心と、シリアに生まれ暮らす非アラブ人としてのアイデンティティーと伝統とを大切にする一人であった。



アレッポ市の東に100kmにあるユーフラテス・ダム